



校長室だより 20号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【今週の行事】 8月30日(月) 課題テスト

31日(火)～9月6日(月) 文化の部準備

9月 1日(水) 航空写真(雨天順延)、第9回閉校行事検討委員会

- 1 「忘れられない文化祭」 第17回卒 谷口三和 20周年記念誌より抜粋
- 2 「多目的体育館での体育大会」 第18回卒 鶴 将宏 20周年記念誌より抜粋
- 3 出逢ったいい話 「” おかげさま” のお守り」 『致知』2002年11月号より抜粋

『忘れられない文化祭』(原文) 第17回卒 谷口 美和

私にとって、今年の文化祭は一番思い出に残る最高の文化祭になったと思います。

一日目からいくと、弁論大会で、一年生がとても良い内容を発表したと思います。特に、12HRの男の子は、弁論の仕方が例年と違い、迫力があってすごいと思いました。

次に合唱では、12HRの合唱で、1年の時自分達がやった合唱を思い出しましたが、練習もよくやっていて、レベルも上がったと思いました。11HRの手話のしぐさを入れての「乾杯」には、とても感動して、妹に教えてもらったりもしました。あんなアイディアが本校にも出るようになったのだなあとうれしくもあり、たのもしくもありました。

バザーでは、私達が作ったカレーライスをおいしいと言って皆が食べてくれました。うれしかったです。

それから、自由参加で、普通はばかを言ったり、ジョークをとばしている人が、楽器を持ち、一生懸命頑張っていて、見ている人の涙をさそう程の演奏、歌を聞かせてくれて感動したし、ブラスバンドでは、クラブになって1年目で、あれほどまでうまくなるとは信じられませんでした。

最後に2日目の劇については、32HR 31HRの劇には、涙、涙の劇で、脚本からキャストまでその役になり切り、テレビ番組として出せるほどのすばらしい劇が見られたと思います。

それから先生方のコーラス、ギター演奏ともに上手でした。そして、全生徒を沸かせた劇も楽しくって、どこの学校でも今年みたいに先生方が劇をする所はないと思います。来年も是非頑張ってください。

今の時期、全国各地で沢山の文化祭が行われていると思いますが、振徳の今年の文化祭はどこにも引けをとらないと思いました。

この２日間、感動あり涙あり笑いありの文化祭でしたが、卒業後もずっと忘れられない文化祭になることでしょう。（３年当時の作）

『多目的体育館での体育大会』（原文） 第１８回卒 鶴 将宏

９月１４日、高校で初めての体育大会があった。予行だけでは中学のときとそう変わりはないが、実際やってみると、かなりやりがいがあった。

雨で１日流れ、当日も運動場が使えず、急きょ市の多目的体育館でやることになった。初めは、こんな狭い所で、体育大会ができるのかと少しやる気がなかった。しかし、はじまってみると、皆、燃えに燃えてきた、音響効果もよく迫力のある体育大会となった。

白団は、途中の順位が１位だったが、結果発表では２位に落ちていた。みんな「優勝」とばかり思っていたのか、ため息だけ聞こえた。

応援の時は、今まで練習・努力してきた人文字を大きな声で歌いながら一生懸命やった。終わった時は、汗が止まらなかった。

応援の方では見事優勝し、団長の宮内さんは、サングラスの下目に涙を浮べていたようだ。３年生にとっても、忘れられない体育大会になったと思う。僕は、初めての体育大会で、初めて高校生活が楽しくなった、と思った。（１年当時の作）

出逢ったいい話 『”おかげさま”のお守り』

ラジオで聴いた若いＯＬの話である。

彼女の生家は代々の農家。もの心がつく前に母親を亡くした。だが、寂しくはなかった。父親に可愛がられて育てられたからである。

父は働き者であった。３ヘクタールの水田と２ヘクタールの畑を耕して立ち働いた。村のためにも尽くした。行事や共同作業には骨身を惜しまず、ことがあると、まとめ役に走り回った。そんな父を彼女は尊敬していた。父娘２人の暮らしは温かさに満ちていた。

彼女が高校３年の１２月だった。その朝、彼女はいつものように登校し、それを見送った父はトラクターを運転して野良に出ていった。そこで悲劇は起こった。居眠り運転のトレーラーと衝突したのである。彼女は父が収容された病院に駆けつけた。苦しい息の下から父は切れ切れに言った。

「これからはお前一人になる。すまんあ……」そして、こう続けた。「いいか、これからは“おかげさま、おかげさま”と 心で唱えて生きていけ。

そうすると必ずみんなが助けてくれる。“おかげさま”をお守りにして生きていけ」それが父の最期の言葉だった。

父からもらった“おかげさま”のお守りは、彼女を裏切らなかった。親切にしてくれる村人に、彼女はいつも「おかげさま」と心のなかで手を合わせた。彼女のそんな姿に村人はどこまでも優しくなった。その優しさが彼女を助け、支えた。

父の最期の言葉がＡ子さんの心に光を灯し、その光が村人の心の光となり、さらに照り返して彼女の生きる力になったのだ。